

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東第三堂（飛鳥藤原第 132 次）

1月からの5ヶ月間に及んだ調査がようやく終了しました。3月20日の現地説明会では、藤原宮朝堂院の東第三堂は桁行15間（約62m）梁行4間（約12m）であったと報告しました。すぐ北にある東第二堂の場合、桁行は15間と同じですが、梁行は5間（約15m）あり、東第三堂より一回り大きくなっています。これまで藤原宮の朝堂は、日本古文化研究所の想定や平城宮の状況などから、第二堂と第三堂は同一規模の建物であるといわれてきましたが、そうではないことが判明したのです。東第一堂（第107次）東第二堂（第120次、125次）東第三堂（第132次）と順番に発掘してきた結果、それぞれ構造や規模に違いがあることが明らかになってきました。東第一堂・東第二堂は、国政を審議する大臣や大納言・中納言・参議の着座する場であり、第三堂以下と格差をつけたと理解することができます。

ところが、調査も終盤に入ってから、意外なことがわかりました。東側に柱筋がもう一列分存在することが判明し、当初の造営計画では、東第三堂は梁行5間であった可能性が高まったのです。最終段階の東第三堂が梁行4間であったことはほぼ動きませんので、5間の建物が完成する前に計画変更がなされたか、建て替えがあったかのいずれかでしょう。調査班は前者であるとみていますが、今後の朝堂院地区の発掘調査によって検証していく必要があります。

この5間目となる柱筋は、断割調査をきっかけに見ることができたものです。少し場所がずれていたら、5間目となる柱筋の存在に気がつかなかったかもしれません。発掘調査の怖さを改めて思い知らされました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹）



手前が5間目となる柱筋（北東から）

キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第 130 次）

壁画の保存・修復と調査を目的とした仮設保護覆屋のなかで、2004年1月末から残余の墓道部の調査が始まりました。3月末までに墓道床面でコロのレール痕跡（道板痕跡）4条と穴2個を検出し、墓道奥で石室の前面部を露呈させました。石室は閉塞石（南壁）の西側が盗掘時に破壊されていて、人一人がようやく入れる盗掘孔があいていました。

そこからみた石室内の壁画は、息を飲むほどのものでした。躍動する四神、居並ぶ十二支像、天空の星々。それらは練達の画家ならではの筆づかいを今に伝え、飛鳥時代最高の芸術の一つといって過言ではありません。

がしかし、壁面の漆喰は大きく剥がれ落ち、残された絵も風化と破壊の危機に直面しています。今後、石室内に流れ込んだ土を除去し、副葬品などを確認したのち、壁画の保存と修復が本格化します。

なすべきことは山積みです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 花谷 浩）



キトラ古墳墓道と石室



キトラ古墳壁画の十二支寅像（赤外線写真）